

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 623 号] 2014 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: [office@bachchor-tokyo.jp](mailto:office@bachchor-tokyo.jp) <http://bachchor-tokyo.jp/>

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 623

May 2014

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## <夏季集中練習 課題曲>

### モテット第 3 番《イエス よろこび》

大村 恵美子 (主宰者)

モテット《イエス よろこび》(Jesu, meine Freude 「イエス、わが喜び」 BWV 227) は、一般によく歌われているバッハの 6 曲のモテット中でもとくに愛されて、バッハの死後もずっと現在にいたるまで広く歌い継がれてきています。

私たちの合唱団の半世紀にわたる思い出の中でも、様々な時期に、様々な人たちの前で、さらに様々な人たちといっしょに、心を合わせてこれを歌ったものでした。すぐに思い浮かぶものでも、ドイツ巡演旅行の間にアルンシュタットの教会や、ケーテンの宮廷広間で、さらにシュトゥットガルトのバッハ・アカデミーで客演した時のアンコールとして、リリング氏門下の合唱団員もおおぜい入っている聴衆と一緒に、心ゆくまで合唱し、たいへんな口笛と拍手が湧き上がった場面など、つぎつぎと今も目に見えるように現れます。

これまで私は、定演プログラム解説など何度も機会があったのですが、字数制限の枠を考えると、なかなか書き出す気になれず、1994 年刊行の『バッハの音楽的宇宙』(丸善ライブラリー) の中でも、わずかに十数行しか述べる事が出来ませんでした。いまこの月報の紙面で、内容豊かで、重く、広く、深いこのモテット

を、存分に伝えようとしても、やはり月報に不相応の分量になるでしょうから、とりあえず、ひとつの表に構成的な要素を整えて、この曲に接する手がかりを提供することにしたいと思います。

全 11 曲の全体が、第 6 曲を中核として、バッハが他の作品にもたびたび用いているように、シンメトリックに配置され、

○奇数番曲 (1, 3, 5, 7, 9, 11) : ヨーハン・フランク (1650 年) のコラール「イエス 喜び」 Jesu, meine Freude (コラール・ハンドブック #77)、第 1 節から第 6 節まで。

○偶数番曲 (2, 4, 6, 8, 10) : 新約聖書「ローマの信徒への手紙」8 章 1-2 節、9-11 節

を歌詞として、じつに整然と、求心的に、しかも迫真的なインパクトで迫り、たたみかけてくるので、聴きながらも歌いながらも、終りのない永遠の実存感に満たされてしまうのです。いちど経験したら忘れられない充実感を得ることになりますので、やはりくたくたく書くのはやめて、既述のものではありますが、上に触れた『バッハの音楽的宇宙』の 2 か所の短文を引用させていただくことにします。

表 : モテット《イエス よろこび》の楽曲構成

Nr.	歌詞出典	歌い出し	声部構成	声部	調性	拍子、他	小節	メッセージ
1.	コラール 第 1 節	イエス よろこび	SI・II/A/T/B	4	ホ短調	4/4	19	喜び
2.	ローマ書 8 : 1	いまや なし	SI/SII/A/T/B	5	ホ短調	3/2	84	霊に歩む
3.	コラール 第 2 節	みもとにより	SI/SII/A/T/B	5	ホ短調	4/4	19	イエス 悪より護る
4.	ローマ書 8 : 2	み霊の いのちの掟は	SI/SII/A	3	ホ短調	3/4	24	死より解放
5.	コラール 第 3 節	いかに猛きあだの	SI/SII/A/T/B	5	ホ短調	3/4	63	ここに立ちて歌う
6.	ローマ書 8 : 9	肉にあらず	SI/SII/A/T/B	5	ト長-ロ短調	4/4 フーガ 終り 12 Adagio	48	み霊 うちに宿る
7.	コラール 第 4 節	去れよ たから	SI・II/A/T/B	4	ホ短調	4/4	19	死も 主われを離さず
8.	ローマ書 8 : 10	キリスト なれこいまさば	A/T/B	3	ハ長-イ短調	Andante 12/8 10 からフーガ	23	死にても 霊は生きる
9.	コラール 第 5 節	わかれん この世に	SI/SII/A/T	4	イ短調	2/4	106	俗世に別れを告げ
10.	ローマ書 8 : 11	み霊 いま汝らのうちに	SI/SII/A/T/B	5	ホ短調	3/2	41	よみがえらん
11.	コラール 第 6 節	失せよ 悲しみ	SI・II/A/T/B	4	ホ短調	4/4	19	悲しみ→喜び

今回つくってみた表を参照されながら、どうぞ、バッハのモテット中、最大規模（約 20 分）の音楽を楽しめますように。

### ■バッハの強靱な対位法のみが音楽化を可能に

このモテット 3 番（註\*）は、ローマ書の言葉による、非常に理屈っぽい「死と生、肉と霊」についての講釈と、「イエス、わが喜び」の情感溢れるコーラルとがない合わされて、実にヨーロッパ的な、総合的な記念碑を構築している。このローマ書のような内容を、東洋のどんな音楽によって表現することも不可能だし、ヨーロッパでも、ひとりバッハの強靱な対位法のみが、音楽化を可能にしたのである。実際にこれを歌ったり聞いたりする時、私たちは、少しもくどく嫌味に感じず、むしろその道理が対位法によって時空の形を得るありさまに、驚嘆する思いにかられるのである。これだけの説得効果をあげられる説教者がいるとすれば、お目にかかりたい。

＜大村恵美子『バッハの音楽的宇宙』p. 103＞

註\*）：モテット 3 番……当モテット《イエス よろこび》のこと。バッハ没後も歌い継がれたモテット作品を、シュミダー目録 (BWV) の順に 1 番から 6 番までの番号で呼んでいる。順番に根拠のないことはカンタータと同様だが、愛好家の間に定着し、通用している。以下のとおり：

- ・第 1 番 BWV 225 …《主にむかいて歌え 新たな歌》  
Singet dem Herrn ein neues Lied
- ・第 2 番 BWV 226 …《み霊 わが弱きを助く》  
Der Geist hilft unser Schwachheit auf
- ・第 3 番 BWV 227 …《イエス よろこび》  
Jesu meine Freude
- ・第 4 番 BWV 228 …《恐るな われなれと共にあり》  
Fürchte dich nicht, ich bin bei dir
- ・第 5 番 BWV 229 …《おお イエス 主 来ませ》  
Komm, Jesu, komm
- ・第 6 番 BWV 230 …《頌めよ主を 世の民こぞりて》  
Lobet den Herrn, alle Heiden

うち、最後の第 6 番 BWV 230 は、様式的な見地からバッハ自身の作に疑問がもたれている。なお、上記目録では、当初第 7 番 BWV 231 まで掲載されていたが、偽作としてはやくに削除された。

### ■熱烈なイエスへの愛、Jesuminnie の典型

1723 年（38 歳）作。さきに、モテット 5 番のところで、この 3 番にも言及したが、このモテットは、対比的な二つの要素がない合わされて作られており、一つはローマ書 8 章の、死と生、肉と霊の省察、もう一つは、コーラル「イエスよ、わが喜び」全 6 節のパラフレーズと変奏である。

このコーラルは、「イエスへの恋歌」Jesuminnie と呼ばれるもののまさに典型で、第 1 節を「イエスよ、わが喜び」と始め、第 6 節の最後を「イエスよ、わが喜び」としめくくっている。何とでもしてイエス

＜公開 夏季集中練習・予告＞

## モテット《イエス よろこび》を 日本語で歌ってみましょう!!

8 月 9 日、23 日、30 日

（土曜日、3 回）

午後 3 時 30 分 ～ 5 時 30 分

夏の土曜の午後、バッハ・モテットの真髓《イエス よろこび》Jesu meine Freude「イエス、わが喜び」を日本語訳詞で歌ってみます。各声部の音取りから始めますので、初めての方でもご参加いただけます。

◇参加無料（事前に申込み。楽譜実費 500 円程度）

◇会場：荻窪教会（日本キリスト教団、荻窪駅南口徒歩 8 分）

◇指導：大村恵美子（当団主宰者・指揮者、訳詞者）

を形容し、ほめ讃えるのが内容である。どのような困難、そして死が私を襲って来ても、イエスから引き離すものは何もない。喜びの君であるイエスが私のもとに来てくださるのだから、と熱烈なイエスへの愛を歌う。例のカンタータ 4 番《キリストは死の縄目につながれたり》を思わせるような、各節ごとに変奏曲となって豊かな局面を展開する手法がとられ、その間に説得力のあるローマ書の言葉が、主として対位的に語られて、終りにむかってこの二つの要素が相乗効果をもってぐいぐいと高められてゆく。最後に、簡潔な 4 声体でコーラルの最終節が端然と歌われると、ドラマティックに徐々に熱を増してきた心が、一気に広い宇宙にむかって解放されたような満足感に浸されるのである。

＜前掲書 p. 114-115＞

## モテット第 3 番《イエス よろこび》

### 公演と練習の予定

＜公演＞ 次々回定期演奏会（第 112 回。2015 年 8 月末/9 月初、福島県南相馬市にて、の計画中）

＜練習＞ 本年 2014 年 8 月の「夏季集中練習」(上掲)。団員募集を兼ねて公開。および、来年 2015 年 1 月からの通常練習。●参加者募集中

なお、当モテットの前詞と訳詞（大村恵美子訳）は、合唱団ホームページ→「歌詞 [上演用] 公開」でご覧いただけます。

<http://www.ab.auone-net.jp/~bach/bwv227.htm>

## なぜ、日本語か？

### バッハの合唱曲演奏、半世紀の歩み

大村 恵美子

東京バッハ合唱団は、原語主義一辺倒のわが国にあって、1962年の設立の初日から、バッハのカンタータなどを日本語に訳して歌ってきました。先年《ロ短調ミサ曲》の訳詞上演を果たすことによって（2011年12月3日・杉並公会堂、第106回定期演奏会）、バッハの主なる合唱作品（240曲ほど）の、すべての音符に訳詞をつけ終わりました。そのうちの多くをステージに乗せて、独唱やオルガン、オーケストラとともに上演しています。

わが国でもっとも伝統あるバッハ専門の合唱団が、日本語で上演していることに戸惑いを感じる方が多いようですが、バッハのカンタータや受難曲、モテットやオラトリオというものが、元来、心の叫びとしての祈りの歌であるかぎり、魂そのものである母語（自国語）によって、歌われ・聴かれることにこそ大きな意義があるはずです。バッハ音楽の源泉に、ルターのドイツ語（バッハの母語！）訳聖書の一語一語があり、民衆によって愛唱された讃美歌（コラール）の旋律と歌詞があるという認識は、教会音楽にたずさわるすべての方々に共有されていることでしょう。神と信徒とを隔てる宗教エリートのラテン語の壁を打破して、民衆のことばで聖書を読み、日常のことばで讃美歌をうたう、ここから宗教改革者たちの活動が始まったのでした。

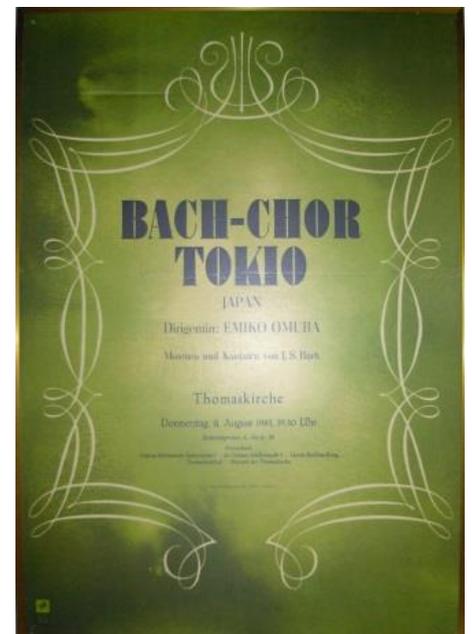
もともとバッハの音楽作品は、テキストから喚起される情緒・情感の音楽表現力や、意味・思想の音楽的イメージの巧みさにおいて卓越しているため、ドイツ語やラテン語といった個々のテキストの言語の枠をこえて、他のさまざまな言語による訳詞上演を容易にしています。こういったバッハ音楽自体がもつ潜在力と、プロテスタンティズム本来のあり方への理解とがあいまって、自国語による演奏活動は、英米語圏、北欧諸言語圏、フランス語圏をはじめ、多くの言語圏ですでに積極的に実践され、愛好されています。しかしここ日本では、日本人の合唱団が発音の特徴や抑揚をドイツ語に似せる努力をかさねて、同じ日本人の聴衆に聴かせる……、聴衆は、字幕あるいは対訳を見ながらの隔靴搔痒のじれったさを「芸術のありがたさ」と取り違えている……。もちろん、本場ドイツの聴衆からも喝采をあびるほどの、高度な音楽性をそなえた合唱団がいくつも活動を開始したことは誇らしいかぎりですが、歌い手が、その歌詞と自分の魂とをどれほどの深みで共鳴させているかと問えば、ドイツ語を母語とする歌い手たちの共感の奥深さには、とうてい及ばない

のではないのでしょうか。注意ぶかい聴き手には歴然と見徹せるものです。

\*\*\*

バッハ生誕300年祭をむかえた1980年代から、日本でも、バッハを取り上げる多くの合唱団が活躍を始め、それまでは「バッハ合唱団」で済んでいたのですが、そうも行かなくなってきました。ドイツ統一前の1983年に東ドイツ芸術公団の招きにより、ライプツィヒ聖トーマス教会での、日本の市民合唱団としては初の公演を開催していただいた時のことです。ライプツィヒに到着した日の散策で、街角の広告塔の緑色のシックなポスターに、BACH-CHOR TOKIOの大きな文字を見たときの感動は忘れられません。東京のバッハ合唱団、これが「東京バッハ合唱団」命名のはじまりでした。私たちのコンサートを告知すべく現地が用意してくださったもので、チケットは4マルクから8マルクと記されています。当時のドイツマルクの価値は見当つきませんが、遠い東洋の、自由主義圏からの客演には相当の興味をもってくくださったようで、当日のトーマス教会は満席でした。開演前の挨拶を請われて、私は「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」（マタイによる福音書18:20）を結びとしました。

このときのプログラムは、モテットの《イエス わが喜び》(BWV 227)と《恐るな われなれと共にあり》(BWV 228)、および2曲の、いずれもこの年が生誕500年にあたっていたルターのコラール詞によるカンタータ、第4番《キリスト 死につながれしが》(BWV 4)と第80番《堅き砦ぞ わが主は》(BWV 80)で、そのうち3曲は、ドイツ人聴衆の前ですから当然のことですが、原詞で歌い、カンタータ4番のみは、日本語訳詞での演奏をお聞かせしたのでした。終演後の教会広場に多くの方が残って、私たちをとりまき、口々に熱い共感の思いを伝えてくださいました。なかでも「日本語の演奏、とても感動的でした」といった感想が多かったのですが、そう語るどの人びとの表情にも「メッセージよく伝わりましたよ、ありがとう」という言外の感謝がこめられているように思われたものです。母語により魂をこめて歌うことができた結果にほかなりません。キリスト教文化が危険視されていた時代があったのです。ベルリンの壁



の崩壊にいたるライブツィヒの月曜デモは、まさにその前年からこの街で始まっていました。「心に発し、願わくはふたたび、心に至らんことを」は、ベートーヴェンのキリエの楽譜への有名な書き込みですが、この場面にこそふさわしいものだったと言えるでしょう。

\*\*\*

東日本大震災から 3 年がたちます。合唱団創立 50 周年の記念事業として、冒頭に述べた《ロ短調ミサ曲》を皮切りに、バッハの大曲のみを連続して日本語で上演する企画をたて、いよいよ本格的な練習にかかろうとしていた 2011 年 3 月 11 日の午後、東京にいた私たちは、突如、とてつもない揺れに襲われました。激しい巨大な揺れがいつまでも続いて、いったい何事が始まるようとしているのだろうか、と息を呑んだものでした。後に知ったことは、皆さんがご承知のとおりです。私たちの驚きと怖れなど比べるべくもない大惨事が起こっていました。私は東京にいて、今に到るも解決の見通しの立たない被災地の方々の上を思いながら稿を起こしていますが、読者の多くの方がまさにその当事者でいらっしゃるはずです。この稿が出るころには、4 か年を費やした 4 作品 5 公演のチクルス最終回《ヨハネ受難曲》(3 月 15 日・杉並公会堂、第 110 回定期演奏会)を終えています。

動き出していた創立記念事業をこなしながら、被災地の方々との連帯を模索していましたが、ようやくその時期を迎えられそうです。来年の夏ごろには、2、3 のカンタータとモテットなどをもって被災地を訪ねようと、現地の方々との折衝を始めました。もちろん、バッハ作品は日本語歌詞で歌います。候補曲の一つ、カンタータ第 92 番《わが心 思い 主にゆだねたり》には、〈山崩れ去るとも 高き丘沈むとも〉とか〈波われを攫(さら)いて 奈落に引き寄すとも〉などの歌詞があります(舟上のイエスが風と海を叱って嵐を静める、が主題)。また、コーラルは〈いざ主よ 委ねん われをながみ手に〉と歌います。ドイツ語で歌えば、美しい響きのなかで何ごともなく過ぎるコンサートとなるのでしょうか。Herr (主) や Gott (神) ではなく、〈主よ〉〈神よ〉とそのとおりに何度も歌います。現地の市井の人びとにとって、「主」とは何でしょうか。このように日本語演奏は、生々しい格闘をひき起こすのかも知れませんが、これがバッハの真実であってみれば、ほかに仕様がありません。教会のバッハが市民のバッハへと脱皮する試みでもありましょう。

地元の合唱団が受け皿となることを申し出ていただきました。彼らの仕上げた曲との合同演奏会となるのでしょうか、バッハ作品への有志の参加もあるのでしょうか、夢はふくらんでいきます。

(日本キリスト教団出版局「礼拝と音楽」No. 161、2014 年 5 月 1 日発行号より転載。ただし当月報掲載は、文字数等、元原稿のまま)

## バッハ・カンタータと教会暦の聖句一覧 ⑫

<b>BWV 123</b> 《いとしインマヌエル わが魂の救い主よ》(1725.1.6) Liebster Immanuel, Herzog der Frommen <b>【教会暦】</b> 顕現節(1/6 固定)(他に=BWV 65, 248/VI) <b>[(書簡)]</b> イザヤ 60:1-6. BWV 65 に同じ。 <b>[福音書]</b> マタイ 2:1-12。(同上)
<b>BWV 124</b> 《イエス 共にあらん》(1725.1.7) Meinen Jesum laß ich nicht <b>【教会暦】</b> 顕現節第 1 日曜日(=BWV 32, 154) <b>[書簡]</b> ローマ 12:1-6. BWV 32 に同じ。 <b>[福音書]</b> ルカ 2:41-52。(同上)
<b>BWV 125</b> 《われは去りゆく 安らかに》(1725.2.2) Mit Fried und Freud ich fahr dahin <b>【教会暦】</b> マリヤの潔めの祝日(2/2 固定)(=BWV 82, 83, 157, [(書簡)]マラキ 3:1-4. BWV 82 に同じ。 200?) <b>[福音書]</b> ルカ 2:22-32。(シメオンの頌歌、同上)
<b>BWV 126</b> 《み言葉もて 生かし》(1725.2.4) Erhalt uns, Herr, bei deinem Wort <b>【教会暦】</b> 復活節前第 8 日曜日(=BWV 18, 181) <b>[書簡]</b> 2 コリント 11:19-12:9. BWV 18 に同じ。 <b>[福音書]</b> ルカ 8:4-15。(同上)
<b>BWV 127</b> 《イエス 真の人 真の神こそ》(1725.2.11) Herr Jesu Christ, wahr' Mensch und Gott <b>【教会暦】</b> 復活節前第 7 日曜日(=BWV 22, 23, 159) <b>[書簡]</b> 1 コリント 13:1-13. BWV 22 に同じ。 <b>[福音書]</b> ルカ 18:31-43。(同上)
<b>BWV 128</b> 《主の昇天にこそ》(1725) Auf Christi Himmelfahrt allein <b>【教会暦】</b> 昇天節(復活節後 40 日)(=BWV 11, 37, 43) <b>[書簡]</b> 使徒 1:1-11. BWV 11 に同じ。 <b>[福音書]</b> マルコ 16:14-20。(同上)
<b>BWV 129</b> 《ほめ讃えよ 主を わが光いのち》(1626-27) Gelobet sei der Herr, mein Gott <b>【教会暦】</b> 三位一体節(=BWV 165, 176) <b>[書簡]</b> ローマ 11:33-36. すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっている。 <b>[福音書]</b> ヨハネ 3:1-15. ニコデモにイエスは答えて「だれでも水と霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできない」。
<b>BWV 130</b> 《こぞりて 主を頌め》(1724) Herr Gott, dich loben alle wir <b>【教会暦】</b> ミカエルの祝日(9/29 固定)(=BWV 19, 50, 149) <b>[(書簡)]</b> ヨハネ黙示 12:7-12. BWV 19 に同じ。 <b>[福音書]</b> マタイ 18:1-11。(同上)
<b>BWV 131</b> 《深みより 主よ われはなれを呼ぶ》(1707) Aus der Tiefen rufe ich, Herr, zu dir <b>【用途】</b> 悔い改めの礼拝
<b>BWV 132</b> 《道を備え 直くせよ》(1715) Bereit die Wege, bereitet die Bahn <b>【教会暦】</b> 待降節第 4 日曜日(=BWV 147a. ライプツィヒでは斎戒期) <b>[書簡]</b> フィリピ 4:4-7. 主はすぐ近くにおられる。求めているものを神に打ち明けなさい。 <b>[福音書]</b> ヨハネ 1:19-28. わたしは荒野で叫ぶ声である。わたしは後から来られる方の履物のひもとく資格もない。
<b>BWV 133</b> 《喜びて われ 主を迎えまつる》(1724) Ich freue mich in dir <b>【教会暦】</b> 降誕節第 3 祝日(12/27 固定)(=BWV 64, 151, 248/III) <b>[書簡]</b> ヘブライ 1:1-14. BWV 64 に同じ。 <b>[福音書]</b> ヨハネ 1:1-14。(同上)
<b>BWV 134</b> 《いま イエスは生きたもう》(1724) Ein Herz, das seinen Jesum lebend weiß <b>【教会暦】</b> 復活節第 3 祝日(=BWV 145, 158) <b>[書簡]</b> 使徒 13:26-33. 神はイエスを復活させて、わたしたち子孫のためにその約束を果たされた。 <b>[福音書]</b> ルカ 24:36-47. 復活のイエス、弟子たちに現われて、心の目を開かせる。